

「夕顔」 卷冒頭文の翻訳についての考察

——目標言語における意味内容の移し換えの実相——

緑 川 真知子

はじめに

アーサー・ウェイリー訳『源氏物語』が出た後に、二〇世紀を代表する作家マルセル・ブルーストとの比較がよく取り沙汰された。⁽¹⁾発端はウェイリー自身にあると推測できる。というのもウェイリーは、「帯木」の巻中川の邸で人々が朝顔と光源氏の噂話をしてる場面に注して「光源氏十七歳の折から、この女性（朝顔）に求愛している事実は後でわかるのだが、朝顔のことはここまで一切出てこない。ムラサキは読者がもうすっかり朝顔のことを知っているかのように書いている。このような方法はマルセル・ブルーストが使っている」（三九脚注⁽²⁾）としているからである。ウェイリーと同時代の作家として欧米文化圏において注目され、丁度このころ『失われた時を求めて』の最初の英訳が始め話題を攫っていたであろうブルーストの名前を出して、その小説技法と似ているということを示唆している。ブルーストと『源氏物語』の技法の比較を見ることが本稿の目的ではないので細かな

検証はしないが、ブルーストの英訳出版の時期と重なるという右のような事情も加わって、この小さな脚注がその後一人歩きしていったのではないか。

「帯木」で噂される朝顔と同じように、登場人物として物語においては「夕顔」の巻まで一切その関係の発端が語られない六条御息所については、ではどのようにウェイリー訳では扱われているのであろうか。「夕顔」の巻冒頭文のウェイリー訳には、ここにも注記があり、「Lady Rokujō（六条夫人）。物語の進展に伴ってこれが誰なのかだんだんと明らかにっていく」（五四脚注⁽³⁾）と説明されている。当該注において、ウェイリーは先述の「帯木」の巻の脚注の場合のように、ブルーストの名前は出していない。しかしウェイリーは、ここも同じような技法である、と充分認識していたと見て良いであろう。こちらの場合は巻の冒頭文であるという特徴が加わっている。当該注が施されているこの冒頭部の原文は「六条わたりの御忍び歩きのころ」（二三五）である。ウェイリーはこの部分の自身の英訳に注して「六条夫人」[ady]

Rokujō」としているわけである。原文には指摘するまでもなく、

「六条夫人 Lady Rokujō」に相当する六条御息所というような呼称は見あたらない。単に「六条わたり」である。確かにこれは次に「御忍び歩きのところ」という表現を伴うことから、行間の意味を汲み取っていくと、六条という場所とそこに居住している人物という二重の意味が読み取れる。つまり「六条」は一種のメトニミー（換喩）としての働きを帯びている。

行間の読みを要求する、このような表現は一体どのように異なる言語に置き換えられ得るのであるか。ウェイリーは「夕顔」の巻冒頭文をどう訳し、そして何故このような脚注を施したのか。

翻訳書の訳者による注記は、翻訳によつて失われるもの、或いは翻訳では表せないものを補う役目があるだろう。ならばそこには翻訳の本質に関わる問題が潜んでいるのではないか。原典に忠実に翻訳しようとしても、言語体系の異なる言葉への翻訳においては避けられない、失われてしまうものをいかに掬い上げるのか。翻訳者はどのような決断や決定をくだすのか。本稿においてはウェイリーの注記が施された「夕顔」の巻冒頭部分をその他の英訳との詳細な比較分析を通し、また代表的な現代日本語訳も参照しこれらを検証する。

1

まず、当該冒頭文を引用する。

六条わたりの御忍び歩きのところ、内裏よりまかてたまふ中

宿に、大貳の乳母のいたくわづらひて尼になりにけるとおらはむとて、五条なる家たづねておはしたり。 (一三五)

この文章に組み込まれている情報を整理してみる。(1) 光源氏は六条に住む女性のところへ忍んで通っている。そして(2) 内裏からそこへ出掛ける時、(3) 中休みの場所として、(4) 尼になった(5) 重い病気の乳母を(6) その五条の家に(7) 見舞った。大雑把に解釈して七つぐらいの情報が盛り込まれている。これらを念頭に、当該引用部の翻訳の問題について、以下検証する。

『源氏物語』には現在までに抄訳を含め次の五つの英訳がある。1 末松謙澄訳(抄訳、一八八二年)⁽⁶⁾ 2 アーサー・ウェイリー訳(一九二五年・一九三三年)⁽⁷⁾ 3 エドワード・サイデンスティッカー訳(一九七六年)⁽⁸⁾ 4 ヘレン・マツカラ訳(抄訳、一九九四年)⁽⁹⁾ 5 ロイヤル・タイラー訳(二〇〇一年)⁽¹⁰⁾。

それぞれの英訳「夕顔」の巻の冒頭、先の日本語原文からの引用に相当する部分を次に引用する。(末松訳は英語を母国語とせず外国語として、成長してから習得した人間によってなされた十九世紀末の翻訳であるという点から、いま一応比較の対象から除外する。しかし末松訳からも必要なところは適宜取り上げる。)

(ウェイリー) It was at the time when he was secretly visiting the lady of the Sixth Ward. One day his way back from the Palace he thought that he would call upon his foster-mother who, having for a long while been very ill, had become a nun. She lived in the Fifth Ward. (五四)

(サイデンスティックカー) On his way from court to pay one of his calls at Rokujō, Genji stopped to inquire after his old nurse, Koremitsu's mother, at her house in Gojō. Gravely ill, she had become a nun. (五七)

(ヤメナト) It happened around the time when he was making secret visits to a lady in the vicinity of Rokujō Avenue. Feeling in need of a brief rest as he was on his way to her house from the palace, he stopped on Gojō Avenue to pay a sick call at the home of his former nurse, Daini, who had become a nun in search of relief from a grave illness. (五九)

(タペリー) In the days when Genji was calling secretly at Rokujō, he decided to visit his old nurse, the DazaiFu Deputy's wife, on the way there, since she was seriously ill and had become a nun. Her house was on Gojō. (五九)

まず形態的なことを見るが、引用した日本語校本においては、これは一つの区切りのない文章だと理解されている。これを、ウエイリー訳は三、サイデンスティックカー訳は二、マツカラ訳は二、そしてタイラーは二つの文章に分けている。(単語数はウエイリー訳が五二、サイデンスティックカー訳が三五、マツカラ訳が七〇、タイラー訳が四〇語である。一番多いマツカラ訳と一番少ないサイデンスティックカー訳では三〇語以上も相違している)。これらの英訳で、先述のウエイリー訳以外で、ここに注記があるのは、タイラー訳のみである。しかし注記の箇所と内容はウエイリーのものとは違う。タイラー訳引用文の最後 Her house was on Gojō. (大式の乳母の家は

五条にあった)に注があり、「五条は内裏と六条 (Sixth Avenue) の間である」(五五)と脚注において説明されている⁽¹⁾。つまり、既述した「六条御息所」についての注記はウエイリー訳のみにあるということになる。いま理解の一助として、各英訳の冒頭部と「六条わたり」の英訳と現代日本語訳を抽出して以下のように一覧表にした。これでわかるように、原文冒頭の「六条わたり」の「わたり」のニュアンスはウエイリー、サイデンスティックカー、タイラー訳には全く訳出されていない。マツカラ訳は「六条わたり」を逐語訳し in the vicinity of Rokujō Avenue (太字緑川、以下同)と vicinity (付近) という単語を使っている。この点だけに着目するなら四つの英訳において「最も原文に忠実で正確なのはマツカラ訳である」と言うことは可能であ

英訳	ウエイリー	サイデンスティックカー	マツカラ	タイラー
始まり方	It was at the time when...	On his way from court...	It happened around the time when...	In the days when
六条わたり	the lady of the Sixth Ward	Rokujō	a lady in the vicinity of Rokujō Avenue	Rokujō
現代語訳	与謝野晶子	谷崎潤一郎	円地文子	瀬戸内寂聴
六条わたり	六条に恋人を	六条あたり	六条のあたり	六条あたりに住む恋人

る。しかしマツカラ訳は表の「段目「始まり方」とあるところに載せてあるように、*It happened around the time when...*（それは…の時に起こったのです。）と始めている。日本語原文でこの言い回しに相当する部分を探すなら、「御忍び歩きのこと」の「ころ」であろう。残り三訳で、少しマツカラ訳に近いのがウエイリー訳の始まり *It was at the time when...*（それは…のころでありました）である。しかし実はマツカラ訳は末松訳の冒頭にこそもつと近いのである。末松訳は以下の様に始まる。

It happened that when Genji was driving about in the Rokujō quarter...（光源氏が六条地区を歩き回っていたところにそれは起こったのです。七六）

当該引用について少し解説を加えると、「ドライビング アバウト（歩き回る）」*driving about* という語句は車が一般化した現代社会においては、光源氏が自動車を乗り回しているイメージが先行してしまう。翻訳の文章も時代と共に古さを感じさせるようになるものだという一例である。またこのように *happened*（起こった）を使用すると、冒頭文の日本語原文が支配する意味分野からの逸脱がより大きくなる。*It was* と *It happened* の意味領域の一部は重なるが、*It happened* とした場合、何らかの事件生起予告の指示性はより強まっており、いわば「それは…の頃に起こったとき」的なニュアンスのお伽噺の語り口を想起させる。先のマツカラ訳、そして末松訳に付した現代日本語訳もそのようなニュアンスを踏まえて「それは…の時に起こったのです」また「それは起こったのです」と、語り手の口調を出しておいた。

happened（起こった）という語は使われていないが、ウエイリー訳もお伽噺口調こそ薄れているが、語り手の口調が読みとれ、現代語訳にはそのニュアンスを生かした。このことと関連するのであるが、サイデンスティックカー訳には「御忍び歩きのこと」の「ころ」を示唆する訳語はない。タイラー訳では「ころ」に相当するのは冒頭の *In the days when...* である。相違は、単に「ころ」が訳出されているか、いないかではなく、実は英訳の文体に女房の語り口が反映されているか、いないかにある。サイデンスティックカー訳以外の英訳はどれも、「それは…でした」という女房が過去を回想して語る口調が英訳に表されているし、タイラー訳もこの「…ころ」に相当する *In the days when...* にその語り口が残されているといえるが、*On his way...* と始まるサイデンスティックカー訳においては、その口調は後退している。当該訳では内裏や、五条、六条という場所的、空間的事実の叙述が女房の語り口を移すことよりも、先行している。ともあれ当該冒頭部の翻訳において最も注目すべきは、既述したように換喩的性質を持ち、多義性を抱え込んでいる「六条」の訳である。一覧表に明らかなように、ウエイリー訳とマツカラ訳が様相を異にしている。例えば「六条」と「五条」という言葉はサイデンスティックカー、タイラー両訳ではそのままローマ字で、それぞれ冠詞なしで、*Rokujō*、*Gojō* とされている。微細なことではあるが、冠詞なしで大文字が使われるのはこれらの言葉が固有の名詞であるということを示象付けるには重要である。ウエイリー訳では *the Sixth Ward*、*the Fifth Ward* と「区」を意味する *Ward* が使わ

れているし、「六」と「五」は Sixth (第六)・Fifth (第五) と英訳されている。またマッカラ訳では the Rokujo Avenue 'Gojo Avenue' と「大通り」を意味する Avenue が補われているが、六と五という数そのものは英訳されず、ローマ字で Rokujo、Gojo と字訳されている。ウエイリー訳の時代には六条という言葉の六が数を表すという事を含め、またこれが都の大通りに付された番号だということなど、余すところなく訳出される必要があつただろう。その意味においては、年代的にサイデンスティックカー訳のずっと後に出版されたマッカラ訳がわざわざ Avenue (通り) という単語を翻訳本文において補っているのは少しくどい。例えば「清水寺」を英訳するのに Kiyomizu-dera Temple とするようなものである。しかしまた、先述のようにタイラー訳においては「Gojo」に注し、「内裏と六条の間」と説明があり、現代の英語圏の読者にとって、必ずしもこれらの言葉が即座に「通りに付された番号」であると理解できるというわけではない。実際タイラー訳注記では、Gojo, Rokujo の後に括弧として Fifth Avenue, Sixth Avenue と英訳も付けている。

以上、場所としての「六条」はそれぞれの英訳において、さほどの困難なく置き換えられていると判断してよいであろう。マッカラ訳「源氏物語」は「平家物語」の抄訳と併せて一冊として纏められている。その「はしがき」で、マッカラはこの英訳が日本古典文学概論を学ぶ学生のための教科書であり、また「源氏物語」や「平家物語」の全てを読む時間のない一般読者の為のものである旨を明記している。教材という性質上、マッカラ訳はより

直訳／逐語訳なものを提供しようという意図を持っていた。一見原作に非常に忠実だと思われるマッカラ訳であるが、その教科書的性格において文学的翻訳とは少し違う場所に位置付けられるので、例外的とするなら、時代を経て英訳はより原文に近い分量の情報 (Rokuno) のみを訳文において提供していくようになってきたといえよう。では、この「六条」が「六条に住まう女性」の意味も示唆していることを、各英訳はどのように扱っているのだろうか。次にこれを検証する。

2

一覧表において太字で示したように、ウエイリー、マッカラ訳ともに lady (夫人) の語を使う。ウエイリー訳では the lady of the Sixth Ward (六条区の夫人) となっている。the lady of (…の夫人) という日本語原文には見あたらない語句が付されている。そして、実はこれがマッカラ訳にも受け継がれ、a lady in the vicinity of Rokujo Avenue (六条通近辺の夫人) となっているわけである。「六条あたり」とは醜化表現でもあり、既述のように「六条」は換喩としても機能しており、文脈から (正確には次に来る「お忍び歩き」という動詞句の使用から)、「六条あたりに住んでいる女性」の意が読み取れる。この二つの意味をマッカラ訳とウエイリー訳では文の表面に、目に見える形 (the lady と Sixth Ward 'a lady と Rokujo Avenue) で記して示す。しかしウエイリー訳は the lady ' マッカラ訳は a lady であり、冠詞の選択に大きな違いがある。ウエイリー訳でこの女性は定冠詞 the を伴って表現されて

いる。これは巻の冒頭第一行目の文章である。にもかかわらずウエイリーは定冠詞を使った。基本的に定冠詞は前にある事柄を受けて付けられる。だがこの文章の前には何もない。敢えて言えば、先行の巻が存在している。この定冠詞 *the* は「皆さんすでにご存知のあの六条の女性」、とすでに話題になっていたあの女性、と解釈できる定冠詞である。もちろんウエイリーは意図的に定冠詞を付けたわけである。そして、だからこそ、ここに注記を施した。注記の内容については先に引用した通りだが、その中で、「六条夫人 Lady Rokujo」という呼称を使ってこの *the lady* を説明している。つまり、注記において早々と「六条御息所」という呼称の英訳を紹介してしまっている。

この巻は今更説明の必要もないが、読者共通の既知の事実があるかのような、事件の渦中から始まるような印象を与えて始まっているのが大きな特徴であるが、無論六条御息所について読者は少なくとも現存の先行巻々においては、呼称も、その存在も知らされていない。このような原文冒頭が持つ効果をウエイリーは定冠詞 *the* の使用、また *It was at the time when* 「それは…の頃だった」とする始まり方によって訳出している。もう一つ言及しておくべきは、*the lady of the Sixth Ward* という訳は、地理上の位置についての情報というよりも、その注釈からもわかるように女性の呼称としての指向性の方が強い。というよりもウエイリー訳当該句全体が、女性そのものを指す呼称となっている。

一方 *a visit to a lady in the vicinity of Rokujo Avenue* とあるマツカラ訳において、*lady* には *a* という不定冠詞が伴われている。

る。ウエイリー訳の *the* によってもたらされる「皆さんすでにご存知のあの」というニュアンスは完全に脱落している。だから、といえるのかもしれないが、マツカラ氏は読者にサスペンスを与える原典のニュアンスからは多少ずれるのであるが、巻で起こる事柄への期待感をもたすために、*It happened around the time when* 「それは…の頃に起こった」という訳によって補っているのだともみさせる。またマツカラ訳において *Rokujo Avenue* は、ウエイリー訳とは逆に *a lady* が居住する地区の地理的情報であり、*a lady* の呼称、ないしは呼称の一部ではない。マツカラ訳は他の二訳に比べるとこのウエイリー訳と表現が最も近い（実際は末松訳と近似しているのだが）かのように見受けられるのだが、その意味する内容は大きく違っているのである。ウエイリー訳は、原文の二重の意味を敏感に感じ取り、それを翻訳に反映させた。無論これは、他の英訳も同様なのであるが、ウエイリー訳においては、微細な訳語の工夫によって、この巻の特徴的な始まrikaたを移し換えるのに、最大限の効果を得るべく際だたせた。では、これは同一言語ではどのように翻訳されているのか、次に当該部分の現代日本語訳を検証する。

3

与謝野晶子『全訳源氏物語』（以下「全訳」）は当該冒頭部を次のように訳している。

源氏が六条に恋人を持っていたころ、御所からそこへ通う途中で、だいぶ重い病気をし尼になった大式の乳母を訪ねよう

として、五条辺のその家へ来た。(八八)

「六条わたりの御忍び歩きのところ」が「源氏が六条に恋人を持っていたころ」と訳されている。「御忍び歩き」が「恋人を持っていく」ことだ、と分かり易い言葉で訳されている。「御忍び歩き」の文化的背景に関する知識を必ずしも持たない現代の読者にストレートに伝わる翻訳である。「全訳」の先駆である同じ与謝野晶子の「新訳源氏ものがたり」(以下「新訳」)の同箇所は次のように翻訳されている。「新」とあるが、こちらが「全訳」より古く、明治四五年(一九二二年)の発行であり、完成は大正二年(一九一三年)である。

源氏の君が六條の君に通ひ初めた頃のことである。内裏を出て其処へ行く途中以前下がった大式の乳母が重い病ひをして、⁽¹⁴⁾ 尼になったのを訪ねようと五條にあるその家へ来た。(六三三) 本文の漢字にはすべてルビが振られているが割愛した。「全訳」と比べると大分違っている。「新訳」では文章は二つに分けられている。「六条あたり」は「六条の君」という呼称として訳されている。またこれは後の出版の「全訳」でも同様なのであるが、英訳と同じく主語(源氏の君―新訳、源氏―全訳)が明記されている。「源氏が六条に恋人を持っていたころ」という「全訳」は、当然ではあるが自身の旧訳「源氏の君が六條の君に通ひ初めた頃のことである」を踏まえた上での訳である。翻訳者による大きな決断がなされて、後の「全訳」においては、言うなれば簡潔な文章が提示された。最終的に与謝野晶子は「御忍び歩き」という語句に「恋人」という訳語を選択しているということになる。今当

該引用部全体は引かないが、谷崎潤一郎訳「忍んで」⁽¹⁵⁾とか円地文子訳「お忍びで」⁽¹⁶⁾などあるような「お忍び」に相当する言葉は使っていない。また与謝野晶子が主語を明示しているのは興味深い。最も新しい瀬戸内寂聴の訳においても、以下のように、「源氏の君」という主語が用いられている。

源氏の君が六条あたりに住む恋人のところに、ひそかに通いにいられている頃のことでした。(二二四)⁽¹⁷⁾

与謝野訳と同じように「恋人」の語が使われている。しかし「お忍び歩き」の訳として「ひそかに通いになられている」という訳語を付けている。瀬戸内訳は読者に多くの情報を与えているわけである。

以上の現代日本語訳をみてきたことから確認したいことは、「六条あたり」という言葉が、古語から現代語へと同一の言語内の翻訳においてさえも、容易には移し換えられないという事実である。一覧表に谷崎潤一郎訳と円地文子訳の当該部も併せて載せておいた。この二つの訳ともに「六条あたり」という以上の情報を盛り込んではいない。原文の換喩性をそのまま伝えようとしているわけである。現代日本語訳において、当該部の翻訳は大きくは二通りあるといえる。原文の多義性(六条、恋人)を明示して訳す(与謝野訳や瀬戸内訳などの方法と、原文に存する以上の情報をあまり盛り込まず、文脈からもう一つの意味を読みとらせようとする谷崎訳や円地訳などの方法である。後者は同一言語内の翻訳の利点ではあるが、読者の知識や読解力を前提としている。

現代日本語でいえば、谷崎訳や円地訳の方法を探るとも分析できるサイデンスティックカー、タイラー両訳をみてみよう。「六条わたり」の部分だけの翻訳をみるなら、両訳共に *at Rokujo* である。前置詞 *at* は *Rokujo* が位置や場所といったものを指すことを示しているわけであるが、サイデンスティックカー訳は *pay one of his calls at Rokujo* (六条に訪ねてゐた) とあり、タイラー訳は *was calling secretly at Rokujo* (密かに六条を訪ねていた) で、両訳共に一方は名詞、一方は動詞としての *visit* (訪問、訪ねる) を使い、「六条を訪れた」、すなわち「六条に住まいする人を訪れた」と、地理的情報と更に含意される情報との二つを組み込んでいる。尤も人を訪問する場合、*visit* に伴われる前置詞は *to* であるので、厳密には「六条に住まいする人」を訪れたとは取れないのではあるが、タイラー訳では、ウエイリー、マツカラ訳にそれぞれ、*secretly, secret* とあるのと同様に「御忍び」を英訳して *secretly* (秘密裡に) という単語を入れている。実際「御忍び歩き」を他言語ないしは現代日本語に訳すには、そしてこの文章を理解するには、ともいえるのだが、翻訳者はまず「御」であらわされる主体を見極める必要がある。待遇表現や敬語の翻訳上の工夫や決断が要求される。また「忍び歩き」という行為の文化的背景も理解しておかねばならない。ともかくタイラー訳における *secretly* という語は、文脈において「六条わたり」という言葉が「ある女性」のことを示唆する助けとなっているだろう。

またこの一文が持つ、物語がもうすでに始まっている、これはその途中からの記述だと思わせるかのような始まり方、つまり六

条御息所と光源氏の関係がすでに始まっている、もうそれは読者にとつては既知の事実であるような書き方に關しての処理についてみてみると、サイデンスティックカー訳では *one of his calls to visit* (訪問) が複数形になっていることによつて幾分か示唆されている。同じくタイラー訳ではこの場合反復を意味している現在進行形 *was calling* で示唆されている。サイデンスティックカー、タイラー訳では微妙にニュアンスが異なっている。前者を逐語訳すると、「何度も繰り返されている訪問のひとつ」となるが、ここで語られている訪問の抽出された一回が、強調されている。後者では、そのような訪問の抽出された一回が強調されるというよりは、この訪問がすでに何回も繰り返され慣習化しているという印象を与えるのではないか。両訳共に複数形とか現在進行形という、より自然な形で冒頭文の特異性を英訳に反映させている。行間に読み取れるニュアンスも翻訳している。ウエイリー訳は見えてきたように、「六条」の場所としての指示性よりも、換喩的に読み取れる「六条に住まう女性」の意味をより重視した。更に、巻の冒頭文において、定冠詞を用いて英語圏の読者の注意を喚起したのであるが、おそらく、まだ物語に登場していない女性に定冠詞を付けたということが、奇異に受け取られないようにという配慮から、注記という方法を用いて補ったのであらう。注記という煩わしさが伴つてはいても、しかし、この巻の原文冒頭が持つインパクトを異なる言語に置き換えて得ている点、両義を言葉の表面に並べて訳出したという「六条」の多義性の処理の古さを差し引いても、瞠目させられる。

おわりに

与謝野晶子は「新訳」の最後で「新訳源氏物語の後に」と題して次のように言う。

……主として直ちに原著の精神を現代語の楽器に浮き出させようと努めた。
(下巻の二、三頁)

「原著の精神」と言い、また「楽器」という比喩を使っている。

この文章は意味内容(原著の精神)と記号形態(楽器)¹⁸の把握が与謝野晶子の中に明確にあったということを如実に示している点興味深い。これは誤訳に対する批判を恐れての予防線としての一文などではなく、確かに与謝野晶子の翻訳に対する信念と読んてよい文章かもしれない。とはいえ、意味内容の移し換えは、多様な技巧が重なっている「夕顔」の巻冒頭文で見てきたように、決して単純なものではなかった。本稿においては、翻訳における重要な営為でありながら、「源氏物語」の翻訳研究においては、これまで考察があまりなされなかったともいえる、まさに、与謝野晶子が言う「原著の精神」たる意味内容が、どのように別な「楽器」たる他言語ないしは現代日本語に移し換えられていくのかを具体的に分析考察した。それによって幾つかの点を明らかにできたかと思う。表面的には原典に忠実であるかのように思われるマツカラ訳が、行間から読みとれる原典の持つ換喩性を反映できていなかった。マツカラ訳は表層の言葉の逐語的な正確さに囚われすぎてしまった故に、より重要である意味内容をその翻訳において取りこぼしてしまっただけである。ウェイリー訳は現存本の

「夕顔」冒頭文のインパクトと多義性を、翻訳文そのものの工夫はもちろんであるが、脚注によっても補っている。換言するなら、それは原典の意味内容を伝えようとするための道具としての機能を果たしているだけではなく、物語のより複雑な技巧(事件の渦中から巻が始まり、重要な登場人物が何の紹介もなく突然登場するということなど)に關して読者の注意を喚起している。英訳の歴史と欧米における日本研究の蓄積の上に成り立つサイデンスティック・訳、そして新しいタイラー訳においては、「六条」を大文字にするという工夫をしつつ、Robinoとそのままだ訳し、言うなれば、なるべく原典に近い情報の分量だけを使い、原典の行間から読みとれる解釈を移し換えている。付け加えるならタイラー訳においては、膨大な脚注が、より一層原典に近い情報量(本稿では触れる余裕がなかったが、同英訳における呼称の翻訳についていえることである)²⁰による英訳本文を可能にしたといえよう。

翻訳の定義を持ち出すまでもなく、翻訳の根本は解釈であり、突き詰めれば認識論へと辿り着くといえる。当然ながら、翻訳における「忠実性」は言葉の表面上(記号形態)の問題だけではなくのである。翻訳の研究が独立した学問分野として自立しつつある今、翻訳されたものが、一つの異本を形成するという認識すら芽生え、また翻訳研究の深化に伴い、翻訳そのものの価値の見直しが起こり、翻訳は芸術の領域にさえ含まれるようになってきている。文化や文明が未だにそれぞれの独自性を主張する一方、過去と比するなら相対的には異文化間の壁は薄くなってきたことは確実にいえる。翻訳研究のこのような進展と現状は、翻

訳者が原典(起点言語)の或る文章を目標言語に移し換える時に、それが正確に翻訳されているか(誤訳があるか)どうかということに拘泥するより(というより誤訳を認定する判断基準はきわめて恣意的なものにならざるを得ないので)、翻訳者が原典の何に重点を置き、どこを強調して訳すかということに目を向けさせる。翻訳は起点言語の意味内容の移し換えである、と言うのは易しいが、その実相は見てきたようにきわめて複雑であり、本稿でおこなったように、個々に分析される必要がある。そしてその分析の蓄積は、原典のあらたな解釈を探っていく別の道程なのでもある。

注(1) 井上英明「アーサー・ウェイリー」(『源氏物語ハンドブック』所収)、新書館、一九九六年。また残念ながらまだ管見には入っていないが、これに関する博士論文 Shirley M. Loui, *Murasaki's Genji and Proust's Recherche: a comparative study* (Lewiston, N. Y.: E. Mellen Press, 1991) がある。

- (2) Arthur Waley, *The Tale of Genji* by Lady Murasaki (London: George Allen & Unwin, 1926-1933, 6 vols.; reprinted in 2 vols. by Charles Tuttle, 1970). 本稿における引用はタートル版に拠る。注原文は "We learn later that Genji courted this lady in vain from his seventeenth year onward. Though she has never been mentioned before, Murasaki speaks of her as though the reader already knew all about her. This device is also employed by Marcel Proust."
- (3) C. K. Scott-Moncrief 訳(最終章のみ Stephen Hudson (本名 Sydney Schiff) 訳) 一九二二-一九三〇。初章 "Swann's Way" (一九二二) はブルースト没後二ヶ月後の出版。しかし、ブルースト死後、決定版として学問的に認証された本文が出版されたのは一九五四年であり、英国人は定本ではないものをもとにして英訳され

たものを長い間読んでいた。

- (4) 注原文は "Lady Rokujō. Who she was gradually becomes apparent in the course of the story."
- (5) 本稿で「源氏物語」の「原文」「日本語原文」ないしは「原典」と書くとき、これは一般的に読まれている「源氏物語」の校本を指す。また翻訳研究においては、原典は「起点言語」(source language)、翻訳されたものを「目標言語」(target language) という。本稿においても副題において「目標言語」という言葉を使い、他にもこのような言い回しを使う場合もあった。なお本稿における引用は新編日本古典文学全集「源氏物語(一)」(小学館、一九九四年)に拠った。括弧内にページ数を付した。
- (6) Kenko Suenatsu, *Genji Monogatari: The Most Celebrated of the Classical Japanese Romances* (London: Trubner, 1882).
- (7) Arthur Waley, *The Tale of Genji* by Lady Murasaki, 6 vols. (London: George Allen & Unwin, 1926-1933; reprinted in 2 vols. by Charles Tuttle, 1970). 本稿における引用はタートル版に拠る。ウェイリーは脚注などに用いた Rokujō の最後の〇の上に長音記号を付している。
- (8) Edward G. Seidensticker, *The Tale of Genji* (New York: Alfred A. Knopf, 1976; reprinted in 2 vols. by Charles Tuttle, 1978). 本稿における引用はタートル版に拠る。
- (9) Helen C. McCullough, *Genji & Heike: Selections from The Tale of Genji and The Tale of the Heike* (Stanford: Stanford University Press, 1994).
- (10) Royall Tyler, *The Tale of Genji* (New York: Viking, 2001) 以下「タイラー」と略す。引用は本書に拠る。
- (11) 注原文は "Fifth Avenue," between the palace and Rokujō, "Sixth Avenue."
- (12) テンカハ This book (中略) is intended for students in survey courses and other who may lack the time to read *The Tale of Genji*

and *The Tale of the Heike in their entirety.*

- (13) 与謝野晶子『全訳源氏物語』上巻、角川文庫 一九七一年 改版
初版、引用は本書に拠る。以下『全訳』と略記。(初版は金尾文淵
堂 一九三八年、一九三九年)

- (14) 与謝野晶子 書名は正しくは『新訳源氏ものがたり』金尾文淵堂
明治四五年(一九一二年)。以下『新訳』と略記。

- (15) 谷崎潤一郎『新々訳源氏物語』巻一、中央公論社、一九六四年。

- (16) 円地文子『源氏物語』巻一、新潮社、一九七二年。

- (17) 瀬戸内寂聴『源氏物語』巻一、講談社、一九九六年。

- (18) 副題ですでに「意味内容」という語をもちいたが、本稿において
は、いわゆるシニフィアン、シニフィエの訳語としてそれぞれ、記
号形態、意味内容という言葉を使う。

新刊紹介

秋山虔・三田村雅子著

『源氏物語を読み解く』

秋山虔氏と三田村雅子氏の対談集。ともに『源氏物語』研究の第一人者である両氏が、その尽きぬ魅力について語り合う。

巻頭では、現在の両氏の研究の出発点ともいふべき『源氏物語』との邂逅や、学生

時代のエピソードなどが語られ、これから研究を志す人にとつてたいへんに興味ぶかい導入部となっている。

本書に取り上げられるテーマは「桐壺巻をめぐって」「空蟬はどんな女性か」「六条御息所と物の怪」「須磨流離を考える」「玉鬘十帖に見る六条院の物語」「若菜巻の諸問題」「大君・中の君物語」「浮舟物語」など物語全編に及ぶ。世代も性別も異なる両氏のそれぞれの「読み」のぶつかり合いに

- (19) 古田弘他著『源氏物語の英訳の研究』(教育出版センター、一九八〇年) などがあるが、主に誤訳の指摘が中心となっている。

- (20) ローマン・ヤコブソン、川本茂雄監修、田村すゝ他訳『翻訳の言語学的側面について』「一般言語学」、みすず書房、一九七三年。翻訳についての定義の(2)「言語間翻訳、すなわち、本来の翻訳 translation は、ことばの記号を他の言語で解釈することである。」(五七頁)

- (21) Susan Bassnett, *Translation Studies* (London and New York: Routledge, 1988).

- (22) 富山太佳夫「翻訳とことばの死」、『言語生活』一九八三年、第三八号。

よって、一層豊かな『源氏物語』の世界があらわれていく。

テキストを丹念に読みこむことで新たな視点が不断に開拓されてゆくという、「読み」のしなやかな力に勇気づけられる、先輩方からの贈物のような一冊である。

(二〇〇三年四月 小学館 四六判 二五
四頁 一六〇〇円) [中西智子]